

大島商船高専学生の日本語文法に対する意識について

中澤信幸*

The Japanese Grammatical Senses of Students in Oshima College

Nobuyuki NAKAZAWA

Abstract

Because I want to know the Japanese grammatical senses of the first and second grade students in Oshima College, I researched their awareness of parts of speech, number of words, grammatical senses, and explanations of conjugation. Then I concluded that they can not understand senses of adverbs and prenominal adjectives, the difference between auxiliary verbs and particles; they recognized that “*yonda*” is one word; they can not judge grammatical senses much except for the tense; they prefer Japanese grammar as a foreign language to Japanese grammar as a national language.

Key words: grammatical awareness, parts of speech, number of words, grammatical senses, explanations of conjugation, Japanese grammar as a national language.

0 はじめに

2006年5月13日に、日本語学会で「文法研究と文法教育」と題するシンポジウムが行われた。ここでは国語教育、日本語教育、日本語学の立場から提言があった。そこで問題になったのが、「日本の国語教育における文法教育に関する情報が少ない」ということであった。すなわち、中学校でどの程度文法教育が行われ、どの程度生徒たちに浸透しているかといった情報がないというのである。筆者は高専で国語教育に携わっている立場から、低学年の文法意識を調査することでこの分野の研究に協力できないかと考えた。本研究では大島商船高専の1・2年生を対象に「品詞」「単語の数」「文法的な意味」「活用の説明」の4項目についてアンケート調査を行い、その結果から学生たちの文法意識について明らかにしようと試みた。

1 国語教育における文法教育について

日本の国語教育では、中学校で口語文法（現代語文法）について学習し、高等学校で文語文法（古典文法）について学習することになっている。つまり義務教育である中学校で現代語文法を学習することにより、すべての人が文法に関する知識を身に付けているというのが前提となっている。

1.1 学校文法について

学校教育で教えられるいわゆる「学校文法」は、橋本進吉(1882-1945)の学説がもとになっている¹。その特徴としては「動詞・形容詞・形容動詞・名詞・副詞・連体詞・感動詞・接続詞・助動詞・助詞」といった10の品詞に分けられること、動詞・形容詞・形容動詞といった用言を活用させた後に助動詞・助詞が付くという説明をする点などが挙げられる。例えば「読みます」「読んだ」「読まない」といった語の場合、動詞「読む」の活用形にそれぞれ丁寧の助動詞「ます」、過去の助動詞「た(だ)」、打消の助動詞「ない」が付属したことになり、いずれも2語にカウントされる。

1.2 日本語教育文法との違い

日本の中学校で教えられる学校文法は上記の通りであるが、一方で外国人対象の日本語教育で用いら

れる、いわゆる「日本語教育文法」では別の説明が行われる。すなわちここでは助動詞が存在せず、「読みます」「読んだ」「読まない」といった語の場合それぞれ「読む」の「マス形（丁寧形）」「タ形（過去形）」「ナイ形（否定形）」と説明され、1語でカウントされる。

また日本語教育文法では形容詞・形容動詞という呼称は用いず、それぞれ「イ形容詞」「ナ形容詞」と呼ぶ²。

2 アンケート調査の内容と目的

本研究は、大島商船高専の1・2年生にこの学校文法がどの程度浸透しているかを明らかにするのが目的である。また学校文法の説明と日本語教育文法の説明との、どちらが馴染みやすいかという点も興味のあるところである。

そこで次のような内容でアンケート調査を実施することにした。

2.1 品詞

まず学校文法の基本となる品詞分類について調査することにした。

2.1.1 内容

次のような表を掲げ、その後の選択肢から解答を選ばせることにした。

単語	自立語	活用がある	述語になる（用言）	ウ段で終わる	…1
				「い」で終わる	…2
				「だ」で終わる	…3
		活用がない	主語になる（体言）		…4
			修飾語になる	用言を修飾する	…5
				体言を修飾する	…6
			接続語になる		…7
		独立語になる		…8	
	付属語	活用がある		…9	
		活用がない		…10	

【選択肢】

ア 名詞 イ 動詞 ウ 連体詞 エ 接続詞 オ 副詞
カ 感動詞 キ 助詞 ク 助動詞 ケ 形容詞 コ 形容動詞

2.1.2 目的

学校文法では、単語を「自立語／付属語」「活用がある／活用がない」と分類していった上で、品詞を定める。しかしこの方法は実際には十分には浸透していないように思われる。日常生活で「名詞」「動詞」といった語は普通に使っても、それが「自立語で活用がなく、主語になるもの」「自立語で活用があり、ウ段で終わるもの」と理解している人はほとんどいないのではないだろうか。そこでここでは、この学校文法の基本がどの程度浸透しているか調査するのである。

ちなみに学校文法に基づく正解は「1—イ、2—ケ、3—コ、4—ア、5—オ、6—ウ、7—エ、8—カ、9—ク、10—キ」である。

2.2 単語の数

品詞分類をするためには、文を単語に分割する必要がある。しかし日本語の単語の認定は（英語などとは異なり）容易ではない。学校文法の場合は特に動詞に助動詞が付属している場合、その単語の認定は非常に困難なものとなる。

2.2.1 内容

ここでは次のような文を用意し、単語の数を解答欄に記入させることにした。また参考までに、文にも単語の境界線を直接記入させることにした。

- 1 本を読む 2 本を読みます 3 本を読んだ 4 本を読んだそうです
- 5 本を読まない 6 本を読ませられる 7 本を読ませられた
- 8 本を読ませられたそうです 9 本を読ませられなかった
- 10 本を読ませられなかったそうです

2.2.2 目的

1.1 でも述べたように、学校文法では「読みます」「読んだ」「読まない」はそれぞれ2語にカウントされる。しかしこれも実際には十分には浸透していないように思われる。そこでここでは、学校文法による単語の分割がどの程度浸透しているか調査するのである。

ちなみに学校文法に基づく正解は「1—3 (本/を/読む)、2—4 (本/を/読み/ます)、3—4 (本/を/読ん/だ)、4—6 (本/を/読ん/だ/そう/です)、5—4 (本/を/読ま/ない)、6—5 (本/を/読ま/せ/られる)、7—6 (本/を/読ま/せ/られ/た)、8—8 (本/を/読ま/せ/られ/た/そう/です)、9—7 (本/を/読ま/せ/られ/なかつ/た)、10—9 (本/を/読ま/せ/られ/なかつ/た/そう/です)」である。

2.3 文法的な意味

我々は普段無意識のうちに助動詞などの文法を駆使しているが、実際にそれがどのような意味を持っているかわかっていない場合が多い。

2.3.1 内容

ここでは次のような文を掲げ、その文法的な意味を選択肢から選ばせることにした。

- 1 先生にそう思われる。 2 先生がそう思われる。 3 先生にそう思わせる。
- 4 先生のごことが思われる。 5 それなら父も食べられるでしょう。
- 6 ご飯を食べた。 7 ご飯を食べている。 8 ご飯ができている。
- 9 彼はご飯が食べたい。 10 彼はご飯を食べたがる。

【選択肢】

ア 結果状態 イ 第三者の願望 ウ 自分の願望 エ 過去 オ 進行
カ 尊敬 キ 受身 ク 可能 ケ 自発 コ 使役

2.3.2 目的

これによって、普段無意識に使っている文法に対してどの程度内省が効くか調査する。またこれによって、選択肢に示された文法用語³がどの程度理解できているかも明らかになると考えられる。

ちなみに一般的な文法用語に基づく正解は「1—キ、2—カ、3—コ、4—ケ、5—ク、6—エ、7—オ、8—ア、9—ウ、10—イ」である。

2.4 活用の説明

1.2 でも述べたように、学校文法と日本語教育文法では活用語に対する説明の仕方が異なる。ここでは学校文法と日本語教育文法の、どちらの説明がよりわかりやすいか調査することにした。

2.4.1 内容

次のような項目を掲げ、説明としてより適切と思う方を選択させるようにした。

- 1 「遊ぶ」「見る」「寝る」などの形
ア 終止形 イ 基本形 (辞書形)
- 2 「遊びます」「見ます」「寝ます」などの形
ア 動詞の連用形+丁寧の助動詞 イ 丁寧形 (マス形)
- 3 「遊んだ」「見た」「寝た」などの形
ア 動詞の連用形 (音便形) +過去の助動詞 イ 過去形 (タ形)
- 4 「遊ばない」「見ない」「寝ない」などの形

- ア 動詞の未然形+打消の助動詞 イ 否定形
- 5 「美しい」と「綺麗だ (綺麗な)」の違い
 - ア 「形容詞」と「形容動詞」の違い イ 「イ形容詞」と「ナ形容詞」の違い

2.4.2 目的

ここではいずれもアが学校文法の説明であり、イが日本語教育文法の説明である。日本の学校教育を受けた学生には当然学校文法の方が馴染みがあると想像されるが、日本語教育文法は外国人に対する日本語教育で用いられていることもあって、より日本語の実態を反映しているという見方もできる。そこでここでは、学生たちにとってどちらがより馴染みやすいか調査するのである。

2.5 アンケート調査の対象と実施期間

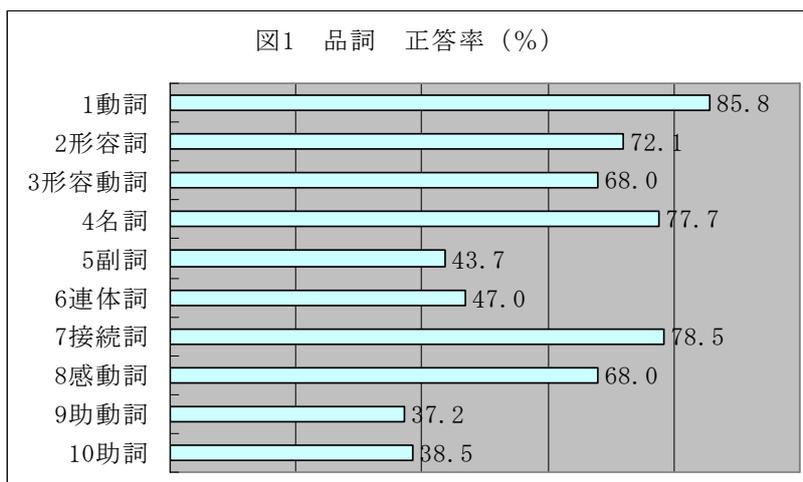
このアンケート調査の対象は、大島商船高専の3学科（商船学科・電子機械工学科・情報工学科）に所属する1・2年生247人である。実施期間は2006年7月14～20日である⁴。

3 調査結果と分析

以下にアンケート調査の結果をグラフに示し、その分析を行う。

3.1 品詞

まず2.1.1で示した品詞に関する設問についての正答率を、図1に示す。



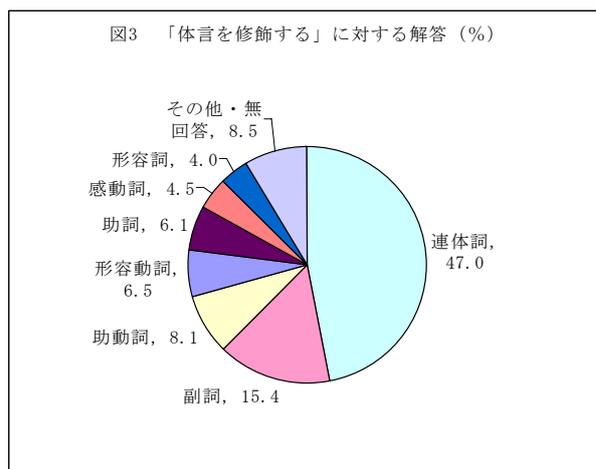
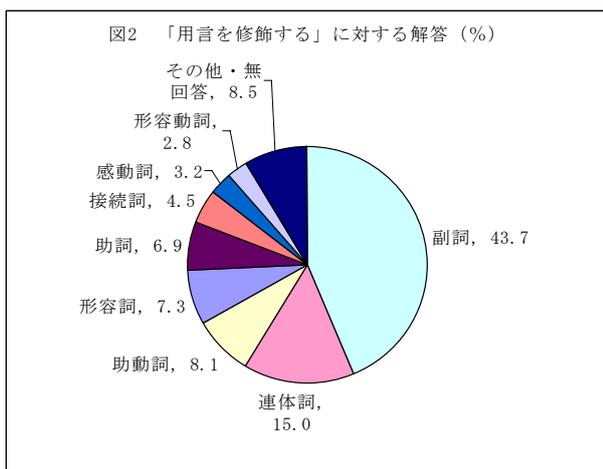
3.1.1 分析

「動詞」が85.8%に及んでいるのを始め、「形容詞」「形容動詞」「名詞」「接続詞」「感動詞」で70%前後の正答率となっている。それに比べて「副詞」「連体詞」は40%台と低い正答率となっている。「助動詞」「助詞」に至っては40%を切っている。

それでは本来なら「副詞」「連体詞」「助動詞」「助詞」と答えるべき設問に対して、学生たちはどのように解答しているのだろうか。

3.1.2 「副詞」「連体詞」

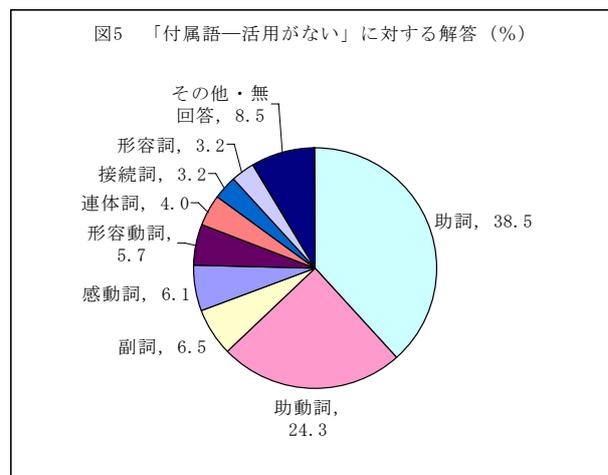
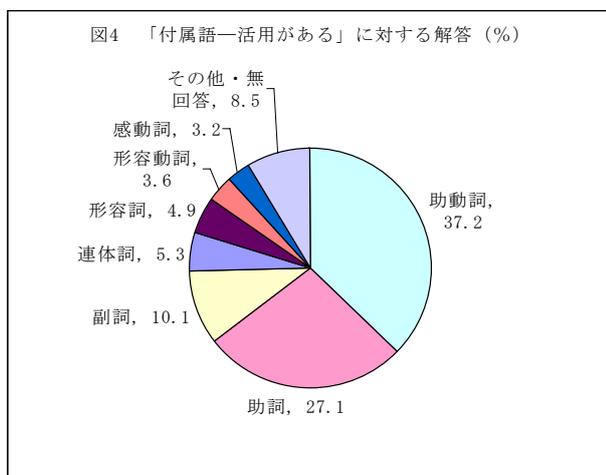
「用言を修飾する」に対する解答の内容を図2に、「体言を修飾する」に対する解答の内容を図3に示す。



「副詞」を「連体詞」と取り違えた、逆に「連体詞」を「副詞」と取り違えた解答がそれぞれ15%ずつあった。しかしそれ以外にも、「助動詞」「助詞」「形容詞」「形容動詞」などのさまざまな解答も見られる。この結果を見ると、「副詞」と「連体詞」を取り違えているというよりも、「副詞」「連体詞」そのものを十分理解できていない学生が多いと考えた方が良さそうである。

3.1.3 「助動詞」「助詞」

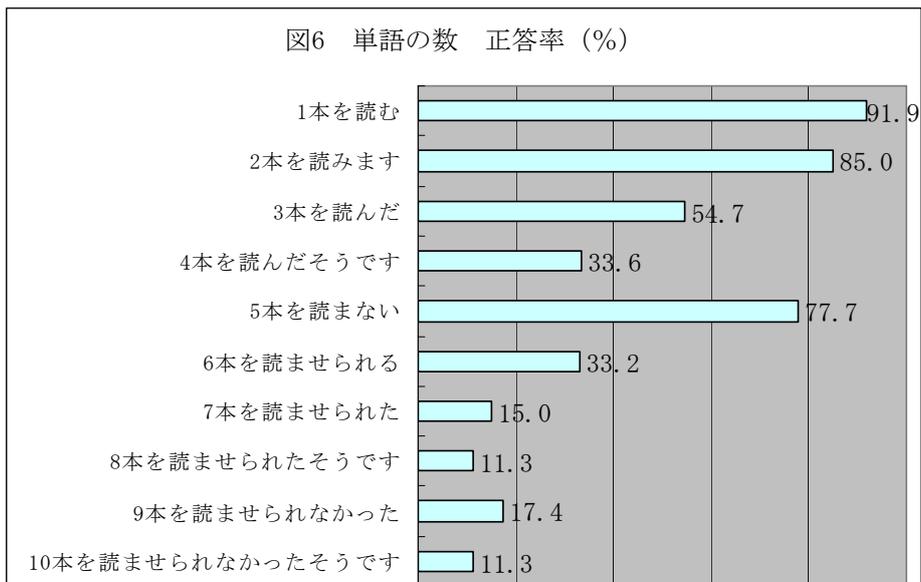
「付属語—活用がある」に対する解答の内容を図4に、「付属語—活用がない」に対する解答の内容を図5に示す。



一見して「助動詞」と「助詞」を取り違えている解答が多いことに気付く。こちらは「副詞」「連体詞」の場合とは異なり、「助動詞」「助詞」が「付属語」であることは理解しているものの、その両者の区別は明確にはできない学生が多いものと考えられる。

3.2 単語の数

次に2.2.1で示した単語の数に関する設問についての正答率を、図6に示す。

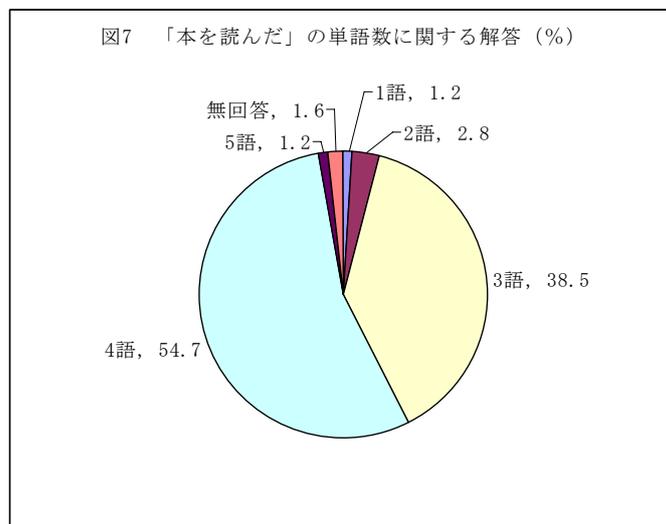


3.2.1 分析

設問 1～5 では、「読む」「読みます」「読まない」といった語を含むものでは約 80%以上の高い正答率となっているのに対し、「読んだ」を含むものではそれらよりも低い正答率となっている。設問 6 以降では次第に正答率は低くなるが、これは文が複雑になるにつれて単語分割も困難になることを示しており、予想できた結果といえる。

3.2.2 「本を読んだ」

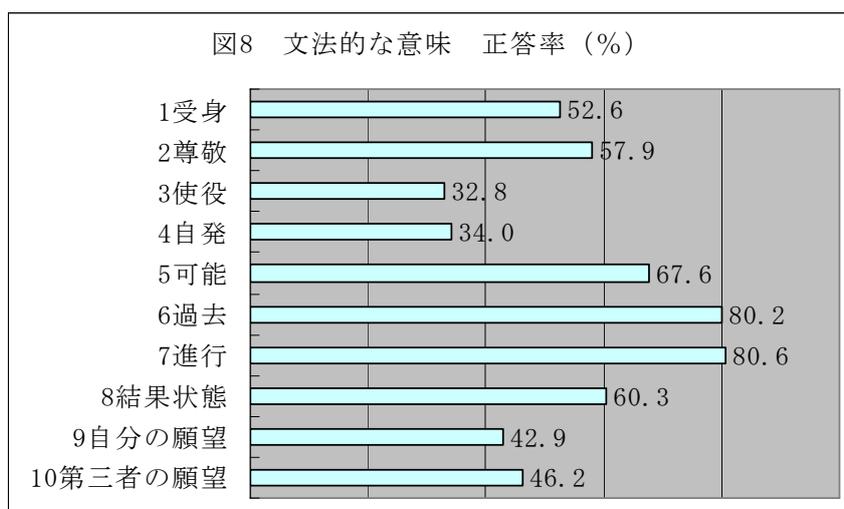
それでは、比較的単純な文でありながら低い正答率となった設問 3「本を読んだ」では、他にどのような答えが出たか。その内訳を図 7 に示す。



2.2.2 でも述べたように、学校文法ではこの文は 4 語 (本/を/読んだ) となる。従って「4 語」が正解となるのであるが、図 7 を見ると不正解だった中では「3 語」が圧倒的に多いことがわかる。これは(「本/を/読んだ」のように)「読んだ」を 1 語と見たところから来るのであろう。「読みます」「読まない」は 2 語と判断できても「読んだ」を 1 語としてしまうのは、ひとえに連用形「読み」が撥音便化していることによるのであろう。

3.3 文法的な意味

次に 2.3.1 で示した文法的な意味に関する設問についての正答率を、図 8 に示す。



3.3.1 分析

「過去」「進行」といった時制に関する項目が 80%を越えているのに対して、「受身」「尊敬」「可能」などはやや低くなっている。これは「…れる」「…られる」が複数の意味を持つことに起因する複雑さから来ているのであろう。「結果状態」「自分の願望」「第三者の願望」については、用語そのものがわかりにくかったかも知れない。

が、やはり際立っているのは「使役」と「自発」であろう。これらは 30%台の正答率に留まっている。

3.3.2 「使役」「自発」

それでは、これらは他にどのような解答が示されていたのか。「先生にそう思わせる」に対する解答の内容を図 9 に、「先生のことが思われる」に対する解答の内容を図 10 に示す。

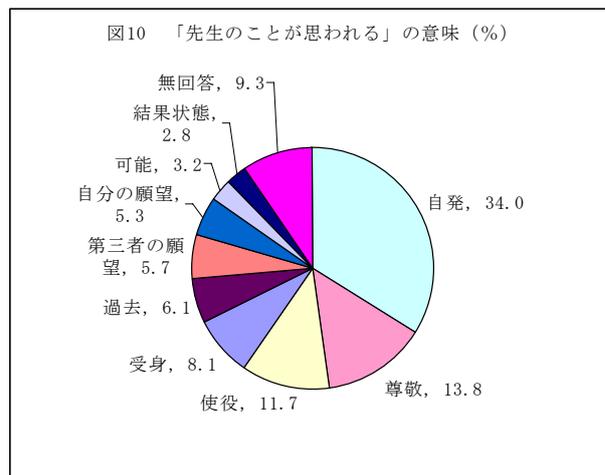
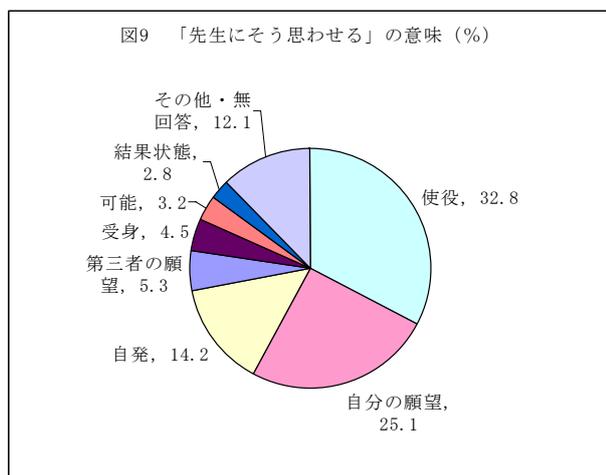
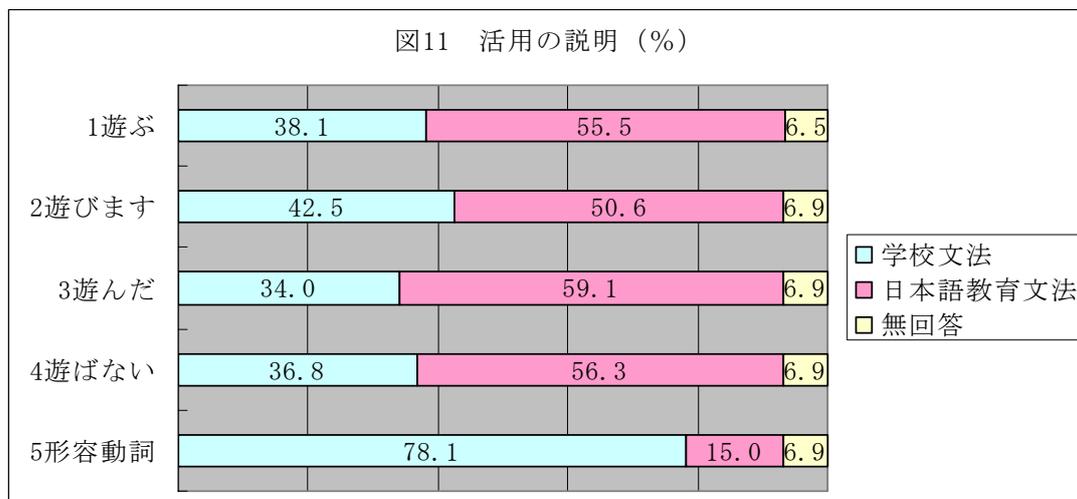


図 9 では「自分の願望」（本来なら「…たい」の説明）という解答が 25.1%に及んでいる。これは恐らく例文「先生にそう思わせる」全体が「自分の願望」であると解釈されてしまった結果であろう。また「自発」という解答が 14.2%あるが、これは「自発」という語の意味自体が理解できていない結果と考えられる。

一方図 10 では、正解である「自発」を除くと比較的偏りなく解答が分散していることに気付く。やはり「自発」という表現形式が理解できていないところから来る結果であろう。「尊敬」という解答が 13.8%あったが、これは「先生のことが…」を主語として取ってしまった結果であろう。

3.4 活用の説明

最後に 2.4.1 で示した活用の説明に関する設問についての分布を、図 11 に示す。



設問 1～4 は動詞の活用に対する説明であるが、いずれも日本語教育文法の説明（「基本形」「丁寧形」「過去形」「否定形」）の方が説明として適切であるという結果が出た。これは多分に「活用形＋助動詞」という複雑な説明が敬遠された結果であると考えられるが、英語教育の影響（特に「基本形」「過去形」）も考える必要があるかも知れない。

一方設問 5 については、学校文法の分類（「形容詞」「形容動詞」）の方が適切であるという解答が圧倒的に多かったが、これは単に「イ形容詞」「ナ形容詞」という用語が日本人にはあまり知られていないことから来る結果であろう。

3.5 まとめ

以下に分析のまとめをしておく。

- ① 品詞については「副詞」「連体詞」「助動詞」「助詞」の正答率が低い。「副詞」「連体詞」についてはそのものが理解できず、「助動詞」「助詞」については相互の区別ができない学生が多いと考えられる。
- ② 単語の認定については、「読みます」「読まない」は 2 語と、「読んだ」は 1 語と認定していた学生が多かった。
- ③ 文法的な意味については、時制に関するもの以外は全体的に正答率が低かった。その中でも特に「使役」「自発」の設問に対する正答率は低かった。
- ④ 活用の説明については、学校文法よりも日本語教育文法の説明の方が適切という解答が多かった。ただし「イ形容詞」「ナ形容詞」についてはあまり支持がなかった。

4 今後の展望

この調査の結果をどのように生かすかということであるが、二つの方向が考えられる。

まず一つ目は学校教育にどう生かすかということである。今回の調査では文法的な意味に関する設問の正答率が低いことが明らかになったが、これについては授業でもっと力を入れて教える必要があろう。ただこれは現代文の授業で教えるというよりも、古典文法や英文法との比較から教える方がわかりやすいかも知れない。英語教育の影響についての調査も残された課題である。

二つ目は現在の学校文法に対する検証である。今回の結果から見ても、「読んだ」を 2 語と認定する現在の学校文法の限界は明らかのように感じられる。現代の日本人に広く受け入れられる「新しい学校文法」を構築する必要があるのではないだろうか。そのためにはまず（外国人対象の）日本語教育文法がどの程度日本人に受け入れられるのか、検証する必要がある。

また今回は大島商船高専の 1・2 年生を対象としたが、同様の調査を広く行うことで学校による差や地域差なども明らかになると思われる。これらについては他日に期することにした。

注

- 1 主な文法学説としては、他に大槻文彦(1847-1928)、山田孝雄(1873-1958)、松下大三郎(1878-1935)、時枝誠記(1900-1967)の文法が知られている。『日本語教育事典』(大修館書店)「日本語文法学説の歴史」の項など参照。
- 2 学校文法と日本語教育文法の違いについては山田敏弘(2004)参照。また日本語教育文法については庵功雄ほか(2000)、同(2001)など参照。
- 3 ここで示した文法用語は山田敏弘(2004)によっている。いずれも国語教育・日本語教育で広く受け入れられていると認められる用語である。
- 4 なおこの時の調査では「動詞の活用」「敬語(やりもらい)」に関する項目も含んでいたが、紙幅の都合により今回の考察からは除外する。

引用文献(五十音順)

- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘(2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』(スリーエーネットワーク)
- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘(2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』(スリーエーネットワーク)
- 山田敏弘(2004) 『国語教師が知っておきたい日本語文法』(くろしお出版)